

令和4年度 国東市：全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

1 結果のポイント

- 平均正答率は、全国平均と県平均を上回った。

	国東市	大分県	全国
平均正答率	71	66	65.6

<領域別正答率>

教科	領域	国東市	大分県	全国
国語	話すこと・聞くこと	70.9	65.3	66.2
	書くこと	51.4	49.1	48.5
	読むこと	70.3	65.1	66.6

- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全領域で正答率が全国平均と県平均を上回った。
- 無解答率は、全ての設問で全国平均と県平均を下回り、解答への意欲がうかがえた。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

(1) 読むこと (2 - (2))

(出題のねらい：登場人物の相互関係について、描写を基に捉える。)

- 「老人」が未来の「ぼく」だと考えられるところとして適切なものを選択する (国東市 68.9%・全国 70.6%)
- ・登場人物の相互関係を捉えるためには、描写に着目しながら読み進めていくことが重要である。登場人物の相互関係は直接的に描写されている場合もあるが、暗示的に表現されている場合もある。このような表現の仕方にも注意し、想像を豊かにしながら読むことが大切になる。
- ・物語の一部分だけを取り上げて登場人物の相互関係について考えるのではなく、物語全体を通して、相互関係について描かれている複数の描写に着目しながら読むことができるように指導することが効果的である。
- ・物語の全文が一枚の用紙に掲載されたシートを活用したり、登場人物の相互関係を物語の展開に合わせて人物相関図などに表したりすることなども考えられる。

(2) 書くこと (3 二)

(出題のねらい：文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける。)

- 【伝え合いの様子の一部】を基に、【文章2】のよさを書く。(国東市 41.2%・全国 37.7%)
- ・「共有」に関する指導事項の定着を図るためには、互いの文章に対する感想や意見を伝え合うことを通して、自分の文章のよいところを見付けることができるように指導することが重要である。自分の文章のよいところとは、第1学年及び第2学年では、「内容や記述などに見られる具体的なよさ」、第3学年及び第4学年では、「書こうとしたことの明確さ」、第5学年及び第6学年では、「文章全体の構成や展開の明確さ」などである。
- ・学習指導に当たっては、伝え合う経験を積み重ねていくことで、自分の文章のよいところを見付けたり、それを言葉で表したりする指導が大切である。本設問のように、自分が書いた目的や意図を相手に伝えたり、感想や意見を具体的に伝え合ったりすることができるように指導すると効果的である。
- ・さらに、互いの文章を読み合うことで、経験の取り上げ方や言葉の選び方、書き方の工夫を認め合い、自分の表現に生かそうとすることも大切である。自分の文章のよいところを見付ける経験を重ねることが望まれる。

3 指導の改善のポイント

(1) これからの国語科の授業づくりの基本的な考え方

①主体的・対話的で深い学びを促すために、以下の8点について留意し、単元構想と授業実践を行うことが大切である。

ア 児童が興味をもつ教材・題材	イ 魅力的な課題の提示、児童による課題の発見
ウ 学習の見通し、本時の目標（めあて）の明示	エ 課題解決的な学習、既習事項を活用する学習
オ 自分の考えを発表・交流する機会	カ 「できた」「わかった」の実感
キ 「できたこと」「わかったこと」の振り返り	ク 日常生活、社会生活への広がり

②国語科は、児童に付けたい力を付けるために、言語活動を単元全体で取り扱い、言語活動を通して指導事項を指導する教科である。学習指導要領改訂後も、国語科の言語活動で育成した言語能力は、他教科の基幹になることは言うまでもなく、今後とも更なる言語活動の充実を図り、授業改善を推進していくという方針は不変である。

(2) 国語科授業改善の方向性

これまでの国語科の授業を振り返った上で国語科の授業改善の方向性を以下に示す。（具体的留意点）

①適切な言語活動の設定とその充実

ア) 付けたい力を付けるのにふさわしい言語活動であるか

- ・単元を構想する際には、付けたい力と言語活動との領域のミスマッチはないか、よく吟味する必要がある。そして、主たる学習活動の設定時間数は十分であるかも併せて考えておきたい。
- ・言語活動を設定した後、課題解決のための手法は適切であるかを考えていく。場合によっては、児童の学習状況（付けたい力が付いているのか等）を把握しながら、弾力的に修正していくことも大切である。

イ) 多様な図書資料等が有効に活用されているか

- ・目的に応じた言語の能力を身に付けさせるために、国語科の教科書だけでなく、多様な図書資料等（書籍、新聞、その他のメディアからの情報）を用いることが必要である。多様な図書資料等を活用する中で、例えば必要な情報を素早く見付ける読みや、必要な部分を詳細に分析する読みの指導が可能となる。また、自分の考えを深めたり広げたりするためにも学校図書館等を利活用し、多様な情報を関連づけて読むことの指導にあたる必要がある。
- ・そのためにも、「不読者」を少なくする取組が必要である。まとまった量の文章を素早く読むことが苦手な児童の学力を育成する基盤として、本に慣れ親しませることが求められる。また、読書によって豊かな語彙形成につながったり、自分を高めたりできるという視点からも、引き続き読書指導の在り方を見直す必要がある。

ウ) 既習事項（または知識・技能）を活用する言語活動であるか

エ) ウ) のために知識・技能の確実な定着を図っているか

オ) 児童の興味関心を喚起する言語活動であるか

- ・興味関心を喚起する言語活動を行えば、国語科の学習が「好き」という気持ちが強くなり、学びに向かう力につながる。

カ) 発表や交流活動を設定した言語活動であるか

- ・本当に話し合いが必要なのか、必要であれば、どのような形式の話し合いが適切であるのかを吟味した上で行うことが大切である。また、ペア学習やグループ学習のみに終わらないために、児童自身に気付かせることと教師が教えるべきことの整理をしておく必要がある。
- ・話し合う手段をとる際には、「何のために」「何の力を高めるために」行うのかということ、児童自身にも自覚させるように心がけたい。
- ・発表の際、ただ原稿を読み上げるようなものになっていないか、ということも重要な指導のポイントである。例えば、メモをもとに発表する、ということも活用力を高める上で非常に重要である。

②児童の主体的な学びを促す「めあて」等の設定、指導に生かせる「より具体的な評価規準」の設定

ア) 適切な「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定があるか

- ・以下の資料を参考にして、設定すること。（大分県教委 HP）
「新大分スタンダードに基づく授業改善 Q&A」

「早わかり！ 単元計画の作成手順 ～資質・能力の確実な育成のために～」

イ) 指導事項・指導領域・評価の焦点化が見られるか

ウ) 単元・指導過程・本時の評価規準に整合性があるか

- ・単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、整合性をもったより具体的な評価規準（概ね満足できる状況）を設定することが求められる。見取りができてにくい評価規準は、指導・支援が曖昧になってしまうと考えられる。

エ) 「B 概ね満足できる」状況が具体的に想定され、それを判断する場面や方法は具体的で適切であるか

- ・評価の場面は1時間で1、2箇所が妥当である。

オ) 「C 努力を要する状況」の児童への指導や支援は行われているか、またその方法（手段）は有効であるか

- ・具体的な評価規準から本時のめあてを設定すること、また、評価規準に基づき「C 努力を要する状況」の児童を見極め、「B 概ね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。

③参考資料を活用した授業実践

○全国学力・学習状況調査の調査問題

○「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例」

<https://www.nier.go.jp/jugyourei/r04/index.htm>

○「平成28年度『小学校学力向上対策支援事業』 個に応じた指導の手引き 小学校 国語科・算数科編」

(3) その他、国語科授業で取り組むべきこと

①学習用語の確実な理解

- ・必要な言葉を使用し、言葉で思考を深めることが必要である。そのために、小学校で使用する教科書に掲載されている学習用語は、その学年で確実に理解させることが大切である。既習の用語は授業で使わせ、指導者が曖昧な言葉を使わないようにしなければならない。

②記述する活動の充実

- ・記述は、「書くこと」の指導だけでなく、3領域の力を向上させるのに有効である。

例（話す・聞く）インタビュー等の取材メモ、スピーチ原稿等

（書く）鑑賞文、図表などを用いた説明・記録、案内、意見文、批評文

（読む）文章を読んで解釈し、自分の考え（感想や意見、評価、批評等）を明確に書くこと。

目的に応じて本文を引用したり要約したりすること。

- ・また、条件に即応して記述しなければならない場面を設定することも有効である。時間・字数・文章の形態や種類・文体・テーマ・対象・使用語彙・要約・引用・例示・技法・構成等、条件を踏まえる必然性のある課題を設定していきたい。

(4) 学校全体で取り組むべきこと

①漢字や語句、文法、表現技法等の習得

- ・漢字や語句、文法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。特に漢字は一度覚えても使わなければ忘れてしまう。繰り返し学習できる環境を学校全体で整えることが大切である。また、国語科以外の教科の時間に、既習の漢字を必ず使用するよう指導することも大切である。

②全校一斉読書や各教科における学校図書館の活用

- ・様々な力を下支えするものとして、活字に親しむことが必要である。その際、文学的文章だけでなく科学的な読み物等にも手を伸ばすように指導する必要がある。学校司書等と連携し、バランスのよい読書指導をすることが重要である。
- ・学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を利活用することも求められる。例えば、新聞を児童の見えるところに掲示し、自然と情報が入ってくる環境を作ることその第一歩となる。また、国語科だけでなく各教科や領域において、図書館活用の推進をしていきたい。

③全国学力・学習状況調査についての研修や情報共有

- ・全国調査の結果分析を各学校の指導の充実に活かすために、学校全体で情報を共有し、授業改善のベクトルを揃えることが重要である。